

# 『アビントンの焼きもち女房たち』に見られる日常生活と笑い

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

ヘンリー・ポーター(Henry Porter, d.1599)が単独で書いたものとして現存する唯一の戯曲が、田園喜劇『アビントンのかんかに怒り狂った二人の女たちの愉快なお話』(*The Pleasant Historie of the Two Angry Women of Abington*)である。はっきりわかっていることは1599年に2回出版されたことだけで、創作年代については推量の域をでない。ローズ座経営者のヘンズロウが会計簿として付けていた日記の貸借表によれば、執筆料の支払いから、おそらく1589年から書かれ1599年までに上演されたことはいくつかある。

## 1. 劇の概要

この劇は、オックスフォード近郊のアビントンに住む二組の夫婦が午餐を共にした後、女房たちが互いの亭主の物腰から嫉妬をつのらせ、西洋双六をしながら喧嘩になり罵り合う。亭主たちは女房たちの陰険な状況を打破する計画を立て、それは両家の娘と息子を結婚させることで和解に導こうとするものであった。

ゴーシー家の息子フランクとバーンズ家の娘モールが夜にバルコニーの上下で出会う場面は、『ロミオとジュリエット』のパロディと感じられ、二人が駆け落ちをするため、養兎場の野原で待ち合わせるのだが、夜陰に紛れるどころか、互いの姿を見失うほど漆黒の闇に迷い込み、追いかけてきた両親や召使い、領主のサー・レイフまで巻き込んで、人違いを執拗に繰り返す場面は、『夏の夜の夢』の妖精の森を彷彿とさせる。闇の野原で「ホー、ホー」と人を呼ぶ声が響き、それが売春婦(ホー)とも聞こえる可笑しさと、出会う相手が人違いでありながら次第に繋がりが見えてくる。

乙女のモールは頭の回転が早く、未恐ろしいほど口達者で、道徳にこだわらず、母親の支配を逃れて駆け落ちに意気込み、フランクは結婚は墓場だと最初は尻込みしているが、友人に恋愛指南を受けてその気になる。バーンズの召使ニコラス・プロヴァーブスはどんな時でも諺で応答し、それが絶妙に会話として成り立っている。

最後は亭主同士の見せかけの真剣勝負に危険を察した女房二人が仲直りをして、若い二人の婚約が認められ、サー・レイフが豪華な祝いの席に全員を招待する形で幕を閉じる。食事が始まり、食事で終わり、結婚と饗宴が両家の和解、社会の調和の象徴となっている。

## 2. 日常生活喜劇

女房たちの期限をとろうと西洋双六を勧める亭主たちや、ビールやワインを飲んで酔っ払う召使いたち、ボーリングを楽しむ息子たち、諺で会話を成立させる人物など、日常の暮らしを生き活きと描写することで笑いを生み出すポーターの劇作法は、『ウィンザーの陽気な女房たち』と類似する点もあるが、一般的にシェイクスピアの喜劇やロマンス劇とは異なるものである。イギリス土着のリアリズムの伝統が、人物描写や会話の端々に沁み込んでおり、それは日用品の使い方、料理や余興、衣服という中産階級の生活を描くことで成立している。

諺で応答するバーンズ家下男ニコラスは、「毛糸で編んだ靴下止めを十文字に結び、ウールのズボンに粉雪みたいに真っ白で、靴は上等な牛の革、赤いリボンをつけ、帽子には香りのいい花束を挿して絹紐で結び、帽子は緑一色、青々とした緑色の才知を緑で包む」と評され、『十二夜』のマルヴォーリオのように度を越したお洒落で描写される。バーンズ夫人は息子をけなすときに「青い上衣はどこへやったの」と召使い用の青い制服を例に出すことで、息子が品位を下げていることを匂わしている。

ゴーシー家下男クームズは、剣を振りかざして「お前なんか細切れにして、輪切りにして、薄切り牛肉にして、炒め焼きしてやる」と、調理用語で吠えたてるし、モールは名前を聞かれた時に「アルファベットの練習帳をみればわかります」とホーンブックに書かれたアルファベットをわざわざ持ち出してくる。モールはエピソードの語りでも、観客の非難の声から生還する特効薬は、「ローサソリス」というスパイスや砂糖を入れたリキュールだと家庭の医学で締めている。

## 3. 西洋双六と父権制

劇の冒頭、午餐を終えた両家がゆっくり楽しもうと双六を用意させる場面には、ゴーシー家とバーンズ家の亭主の台詞から父権制が感じられる。自分たちの代わりに女房たちに勝負をさせて、自分たちは見学をする(*we'll look on*)と高みの見物をする。バーンズ夫人がインチキされそうだから嫌だというと、ゴーシー家亭主は「そんな真似はさせない(*I'll see she shall not.*)」と言い、見ていることを強調する。バーンズ夫人が勝負事ではゴーシー夫人がずるをすると言えば、「私の女房はそんなにうまくありませんか。さあ、さあ、見せて(*Come, come let's see.*)」と見るのが中心になっている。

西洋双六の競技者と見物人が、そのまま女房たちを亭主たちが見守るという構図となり、ゲームの裏に隠された社会の片鱗も覗かせている。